

生まれてきた命を守る

幸せを願う「こうのとりのゆりかご」から始まる支援



■平成29年5月特別養子縁組促進シンポジウム

医療従事者・医療介護部門 受賞者 蓮田 太二

医療従事者・ 医療介護部門 受賞者 蓮田 太二



■こうのとりのゆりかご外観

とブザーとカメラが作動、自動で鍵がかり職員が保護するというものだ。運用を発表した際は反対を含めた賛否の電話が病院に殺到したが、それでも蓮田氏は二人で自宅や車内で産み、緊急事態下になりながら命を守って連れてきた。最も優先すべきは命を救うことだ、そして幸せに生きてほしい」と考え、さらに「開設を後悔したことはない」と、その信念が揺らぐことはなかった。

蓮田氏が「母子共に幸せに生きるための選択肢」として、1988年より実施されている特別養子縁組を支援してきたことも大きい。日本では実母が痛みを伴い出産し育てることが良き母とする思想があるため、里親に対する偏見が強く、子育てをできない状況の親の無理を招くのだ。世界的にも「実親に育てられるかどうかではなく、愛情のある家庭で育つかどうか」が重要であると考えられるようになった現在、あらためて蓮田氏は預かった子の幸せに貢献したと言っている。

蓮田氏は一面的な批判を気にせず複雑な問題を多面的に捉え、最後の手段として「妊娠相談」と「ゆりかご」を取り入れた。母子の幸せのために何ができるのかを考え続けた蓮田氏の取組みは日本全体に二石を投じ、多くの母子の命を救ってきた。しかし、アジアなどその活動が広がるさなか、経済的負担や常駐医師確保の課題が国内普及を妨げているのも事実だ。蓮田氏の医療を超えた活動に対し、より多くの理解と賛同が得られることが社会には必要不可欠である。

産婦人科医として50年以上に亘り母子をみつめ、その命に関わってきた蓮田太二氏。1962年に熊本大学を卒業、同大学産婦人科で研修を積み、1969年より慈恵病院に勤務。1978年に理事長に就任し、1982年のマザー・テレサ来日を機につくられた民間団体「生命尊重センター」の「妊婦と胎児の命の尊厳を守る」運動に感銘を受け、2002年より慈恵病院で「SOS赤ちゃんとお母さんの妊娠相談」を開設した。公的機関では困難な夜間や休日を含めた24時間365日体制で無料電話・メール相談を受け、未婚や望まぬ妊娠、貧困などの相談は年間6,500件を超えると共に、特別養子縁組も約300組にのぼった。

2003年頃、生命尊重センター副代表（現代表）の田口朝子氏の記事をきっかけに、ドイツの「Babyklappe（赤ちゃんの寝床）」と呼ばれる施設を知った。翌年には同氏の誘いでドイツを視察。その後、熊本県内で乳児の遺棄事件が相次いだことも重なり、妊娠に悩む女性とその子を守るため、国内での赤ちゃんポスト創設を決意するに至った。「親が育てられない乳児を匿名で受け入れ、かけがえない命を救い社会全体で育てたい」という信念のもと、世間からの批判を受けながらも、議論し、行政各所への申請、許可を経て2007年、国内唯一の「こうのとりのゆりかご（俗称：赤ちゃんポスト）」の運用を慈恵病院内で開始した。

「ゆりかご」は、病棟の壁に取り付けられた扉を開け、中の保育器に子を置く

推薦者

宮崎 康二

医療法人聖粒会 慈恵病院
顧問(産婦人科) /
内閣府日本学術会議(第二部)

小野 友道

熊本機能病院 顧問

加藤 聖子

九州大学大学院医学研究院
副研究院長、
生殖病態生理学分野教授

神尾 陽子

国立精神・神経医療
研究センター精神保健研究所
児童・思春期精神保健研究部部長

豊田 長康

鈴鹿医療科学大学 学長

宮崎 恒二

東京外国語大学 名誉教授

蓮田 太二

Taiji Hasuda

医療法人聖粒会 慈恵病院
理事長・院長

Director and Chairman of the Board,
JIKEI Hospital

熊本大学医学部卒業。医学博士。熊本大学産婦人科教室の研究員を経て、1969年より慈恵病院に勤務。2006年12月、新生児を匿名で受け入れる窓口「こうのとりのゆりかご（俗称：赤ちゃんポスト）」の設置を熊本市に申請し、2007年4月に許可を取得、同年5月より院内で運用を開始した。日本初の試みとして全国の注目を集める。他にも慈恵病院を拠点に、小・中・高校生を対象とした性教育の出張講義「いのちの講演会」や、生命尊重教育を目的としたアニメーション映画製作の資金集め、母子訪問・育児サークル運営による子育て支援など、さまざまな活動を続けている。

